



軍需創出政権の誕生

金融アナリスト
永山卓矢

【仕組まれた米大統領選挙】

11月8日に行われた米大統領選挙では、民主党候補であったヒラリー・クリントン前国務長官が優勢だとされていた大方の予想を覆し、共和党候補のドナルド・トランプが当選。市場は、外交問題評議会(CFR)に献金している関係からトランプ候補に経済顧問を送り込んでいるゴールドマン・サックスによる策動もあってか、激しく動揺した。

開票が始まった当初――すなわち、9日の東京市場の開始当初はクリントン前長官の当選を先取りして円安、ドル高、株高気味に推移。しかしその後、開票が進むにつれトランプ候補の優勢が伝わり急激に円高、ドル安、株安が進んだが、トランプ候補が勝利演説で過激な発言を控えて無難なものになると、安心感から一転して急激な円安、ドル高、株高になった。

実は総投票数だけでみるとクリントン票の方がトランプ票を上回っていた。実際の選挙結果と食い違ったのは、2000年の大統領選でブッシュ前大統領(共和党)とゴア元副大統領(民主党)が争って以来になる。当時、ゴア元副大統領は選挙結果でも勝利していたといわれている。これと同様に、今回も本当はクリントン前長官が勝っていたようだ。

例えば、激戦州といわれたペンシルベニア、オハイオ、フロリダといった各州では、開票の中盤までクリントン前長官がリードしていた。ところが、終盤になっていずれもトランプ候補が逆転したあたり、何らかの“細工”が施された事を窺わせるものだ。

実際、今回の選挙では黒人層の期日前投票がかなり低かったように、投票が妨害されるケースが相次いだという。対照的に、白人の中低所得者層は投票に行くように促されたようだ。前回や前々回の選挙では黒人層が投票に行くように奨励され、それがオバマ大統領の当選を後押ししたのと対照的である。

本誌10月17日号の当欄で指摘した通り、米権力者層は今夏頃まで次期大統領にトランプ候補を据えようとしていたものの、9月頃になるとクリントン前長官に乗り換えたという。19日に安倍首相が訪米して会談した際に、前長官からロシアに接近していく事が容認されたのがそれを物語っている。

またこれは完全に“オフレコ扱い”になっていたが、前長官が次期大統領に就任したら、これまで反対していた環太平洋経済連携協定(TPP)に一転して賛成の姿勢に方針転換するので、大統領選挙が終わる頃までに、衆議院では法案を通しておくように指示を受けたという。

米権力者層が一時、次期大統領にトランプ候補を擁立するのを諦めたのは、同候補が権力者層の意向に従って動かないのを懸念したためであるようだ。にもかかわらず、結局、選挙で当選させてもらったのは、それを同候補が受け入れたためなのだろう。

選挙戦で勝利が確定した後の演説では、スピーチライターが用意した原稿を忠実に読み上げた事にそれが端的に表れている。

ちなみに、日本側では首相官邸や自民党首脳はクリントン前長官が当選すると思い込んでいたという。ところが、安倍首相だけではトランプ候補が当選する事が米国側から事前に知らされていたようだ。当選が確定した直後にトランプ次期大統領に電話を入れ、すぐに秘書官を米国に派遣する事を決め、さらにジャパン・ソサエティ会長であるW・ロス氏の仲介で今月17日に会談を設定するなど、手際よく動いたのはこのためであるようだ。

【次期政権とレーガン政権との比較】

ところで、米権力者層がトランプ候補を次期大統領に据える事にしたのは、これまで当欄で述べてきたように、従来の金融主導路線から決別し、軍需の創出を中心とする経済成長路線に舵を切るためであると思われる。

実際、中国を「悪の帝国」と呼んで「新冷戦」構造に持ち込むには、オーソドックスな主流派ではなく、かつてのレーガン大統領のように独特な個性の持ち主の方が適任であるといえよう。そういった思惑を背景に、今回大統領を擁立しているのはロックフェラー財閥が設立した米国の外交問題の研究機関CFRや、軍産複合体を支持基盤とする共和党系の新保守主義(ネオコン)派である。

もしそうだとすれば、これからトランプ大統領が行おうとしている政策もレーガン政権のそれと比較する事が可能なはずだ。

かつてレーガンは選挙期間中、「小さな政府」を標榜して政府の役割を低下させ、民間の活力を引き出すために大規模な減税政策と規制緩和の推進を提唱していた。しかし、大統領に就任すると「強いアメリカ」を標榜し、「悪の帝国」ソ連と対峙する上で、民主党から鞍替えしてきたネオコン派主導で国防費を大幅に増額した事で、結果的に「大きな政府」をもたらしてしまった。また「強いアメリカ」は「強いドル」を連想させ、強烈なインフレへの対策として当時のボルカーFRB議長が高金利政策を推進した事もあり、外国為替市場ではドル高が進んだ。

大統領選勝利後のトランプは、早くも就任後100日間で大規模減税政策や公共事業を柱とする経済再生策を実行していく旨を明らかにした。公共事業を推進するとしているのは、「小さな政府」を標榜していたかつてのレーガン政権と異なるところだ。

ただレーガン政権が成立した当時は、民主党政権下の積極財政政策が強烈なインフレをもたらしたとして、ケインズ経済学を否定する風潮が強かった。これに対し現在では、市場重視の右派経済学である合理的期待形成仮説に裏打ちされたリフレーション派も、左派リベラル的な新ケインズ主義と同様に、金融政策とともに財政政策の重要性も指摘している。我々は、こうした時代的な風潮の相違に留意すべきだろう。

もっとも、財政出動政策の主流は大規模な軍需の創出である点で、トランプ政権の政策もかつてのレーガン政権のそれと変わらない。軍産複合体による強固な支持により大統領に押し上げられている以上、その意向には忠実に従わざるを得ないからだ。

【ドル高は容認へ】

為替相場への影響に関してトランプは、これまで日本や中国の為替政策を批判していた。従って、今後は輸出を伸ばす事を目的に、通商面重視のドル安政策を推進するといった見方もある。

しかしこの見方は正しくない。かつてのレーガン政権が「強いアメリカ」を標榜している下で「強いドル」を容認したように、次期大統領も「偉大な(グレート)アメリカ」を掲げている以上、ドル安政策を推進するわけにいかないからだ。

そこで興味深いのが、選挙期間中にFRBの金融政策に対して彼の批判の論調が変わったという点である。

今春、市場が信用不安に襲われている際、彼はFRBが利上げを推進していく姿勢を見せているのを批判していた。これは多分に、それまで新興国に積極的投資を行ってきたゴールドマン・サックスの意向を受けていたのではないかと見られていた。

ところが今夏頃になると彼は、これまでのFRBの緩和的な政策が過剰な信用創造をもたらした事で金融市場を不安定な状態に陥れているとして、批判の論点が変わったものだ。

これこそ、まさに共和党の伝統的な金融政策の観念であると同時に、現在、米権力者層が金融政策の正常化を推進する事で信用不安を引き起こし、過剰な緩和策により「水膨れ」した体質をスリム化しようとしているのに対応したものだ。

まさにこれは、トランプの有力な支持者として知られている著名投資家のカール・アイカーン氏が主張している「米国経済はゼロ金利を維持する事は不可能」という考えに沿ったものである。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ガデウニカル

11月、
全ての押しは買い

米大統領選はブレグジットの再来となった。大方の予想を裏切り、トランプ候補の勝利。ただ、ブレグジットでサプライズを経験したことでショック安は米国では起こらなかった。ひどかったのはアジア市場、特に日本の取引真っ只中で開票が行われ、日経平均は当初想定されたトランプショックの煽りを真っ先に受け、一時前日比1000円安となった。しかしこの流れは午後2時に終り、ドル円も、日経平均もそれ以上下落する事はなかった。想定外はその後の動きだ。NY時間に入り、ダウ平均があまり下がらずに、逆に大暴騰したことだ。

ダウ平均は11月1日よりクリントンのメール問題再燃から売られ4日には17,883の安値をつけた。しかし、7日にはFBIの捜査も打ち切り、世論調査もクリントン氏有利に。そして7日にはダウ平均は大暴騰。これを見るだけで、クリントン勝利は株高とのシナリオが有効であるとの確信を市場は得たはず。ところが蓋を開けてみれば、トランプ氏の勝利。誰もがダウの暴落を疑わなかったことだろう。実際その前のアジア市場は大幅に急落した。しかし、その日のダウは平均は370ドル高、

今週の押し

利食いで様子見

小料理屋のテレビでナイターをやっている。常連客は不機嫌。「カワトウを出さんかい！」暫くして、本当に代打で出てきた。その時、常連客は麦酒を小さなグラスに注ぎながら苦笑いする。「ホンマに出してどないすんねん…」一麦酒会社の昔のCMだ。

今年の米大統領選、ニコニコ生放送だけはNY各所を回り、街の声を拾っていた。今までの報道とは全く異なるトランプ支持者の肉声が、最終的に10万人の視聴者に届いた。勿論、報道通りの熱狂的支持者にも取材をしている。インタビュアーは荒くれ者達の声拾う。彼らは外見とは裏腹に、意地悪な質問に冷静かつ理知的に対応。トランプ優勢を喜びつつ昔のCMの如く「ホンマに当選してどないすんねん」というスタンスであったのには驚いた。支持者も「まさかトランプ」だったのだ。

もう一つ放送を見ていて驚いたのは、トランプの有力スポンサーが取材に応じた事。視聴者の指摘で10月のロイターの記事がネットで拡散。トランプに多額の援助をした彼が、シカゴを拠点に活躍する在米インド人実業家であった事が判明する。トランプはロシア以外にインドと有力なパイプを持っていた。

今週の主な予定・経済統計

10月14日(月)

- ・黒田日銀総裁、講演 ・第3四半期の日本のGDP速報値
- ・10月の中国小売売上高、及び鉱工業生産
- ・ドラギECB総裁、伊財務省主催会合出席
- ・米国地区連銀総裁、各地で講演

10月15日(火)

- ・11月の独ZEW景況感指数 ・第3四半期の独GDP速報値
- ・11月のNY連銀製造業景況指数(−2.00の予想、前月は−6.80)
- ・10月の米小売売上高(前月比0.6%増の予想、前月は0.6%増)
- ・米国地区連銀総裁、各地で講演

10月16日(水)

- ・10月の米卸売物価指数(前月比0.3%上昇予想、前月は0.3%上昇)
- ・同コア指数(前月比0.2%の上昇予想、前月は0.2%上昇)
- ・10月の米鉱工業生産指数、設備稼働率 ・米地区連銀総裁、各地で講演

10月17日(木)

- ・10月の米消費者物価指数(前月比0.4%上昇予想、前月は0.3%上昇)
- ・同コア指数(前月比0.2%の上昇予想、前月は0.1%上昇)
- ・10月の米住宅着工件数(115.5万戸の予想、前月は104.7万戸)
- ・10月の米フィラデルフィア連銀製造業景況指数(7.8の予想、前月は9.7)
- ・米週間新規失業保険申請件数(前週は25.4万件)
- ・イエレンFRB議長、議会証言 ・米週間原油在庫

10月18日(金)

- ・10月の米景気先行指数(前月比0.1%上昇の予想、前月は0.2%上昇)
- ・ドラギECB総裁、講演 ・米地区連銀総裁、各地で講演

そして10日には史上最高値が更新された。トランプ勝利で誰がダウ平均の史上最高値更新を予想できたであろうか。今年最後にして最大のダブル・サプライズである。

さて日経平均だが、これまでのコメント「トランプ候補の勝利から来るショック安は日経平均ではまさに1年サイクルボトムになりえるので、急落は歓迎。絶好の買い場になるだろう」。

ショック安は来たものの、16,111の突っ込みで終わった。となると、1年サイクルは6月24日の安値で付けていたことになる。また20週前後のサイクルも昨年9月27日から綺麗にカウントできる。このボトムは今年2月12日(19週目：弱気型)、6月24日(19週目：中立型)、そして11月9日(20週：強気型)。これが有効であれば、今週は未だ1週目。前サイクルは強気型、その前が中立型でダブルボトムを完成した。これは8年サイクルボトムにもなり得る。今年1月のアイランドリバーサルギャップ17,684~17,515を上抜けば、新長期サイクルの上昇期に入っていることを確認する。従って11月の全ての押し目は買いだ。

目先は20週サイクルの上昇期は10週以上続くと想定される(強気型サイクル)。そのターゲットは18,720±308、さらに、20,332±498。このシナリオは9日の安値が更新されるまで有効。

彼が差別的頑固エロ親父然とした振舞いで選挙戦を戦う前、民主党シンパで優秀なビジネスマンであった事を思い出した。あの映像を見なければ。なぜ勝利宣言後にNY株式や米ドル市場がV字反発したのか、筆者は理解に苦しんだかと思う。

先週、筆者の大統領選の分析は外れた。ただユーロドルの戦略は外れていない“先週末4日の高値は1.1141でチャネルライン上限手前のレジスタンスポイントに差し掛かっている。(まさかトランプの)不安感は恐らく投票日まで続こう、その場合1.12付近までの上昇があるかもしれない。ただ、トランプが勝つ確率は「どうせヒラリー」の空気が薄れると低くなると筆者は見ている。週初7~8日まで上昇しているようなら買いポジションは利食いするのが望ましい。その上で、更に積極的に相場と対峙するなら売りを推奨する。ストップロス水準は1.1250以上の引け値に置き、ストップアウトした場合は損切りドテン買いに回るのが良いだろう”。9日の高値は1.1299であったが、引け値は1.0909。相場は週末11日に1.0830まで下落する。従って慎重派は買い玉の利食いが出来、積極派はドテン売りする事が出来たかと思う。しかし、3営業日で動いた値幅が0.047とは大き過ぎ。これは10月1カ月の値幅に相当する。従って積極派の売りは週初で利食い、今週は全トレード様子見としたい。



今週の相場風林語録

意地商い皆向かえ(2)

意地になるといのは、思いがスラスラ運ばないから感情的に頑張るわけで、その限りでは相場に逆らうかたちである。日柄をかなり経過して、高値にある相場を、さらに持ち揚げようと買っても、買っても相場が言うことを聞かなくなると、間もなく音を立てて崩れることが多い。

今週の**九星★波動**

南雲 紫蘭

荒れた二黒土星

まさに想定外といった相場からのスタートといえます。一見あまり良く見えないのですが、8～9月のリバイスアップや時給の上昇を考えれば、想像以上の雇用堅調さといえました。

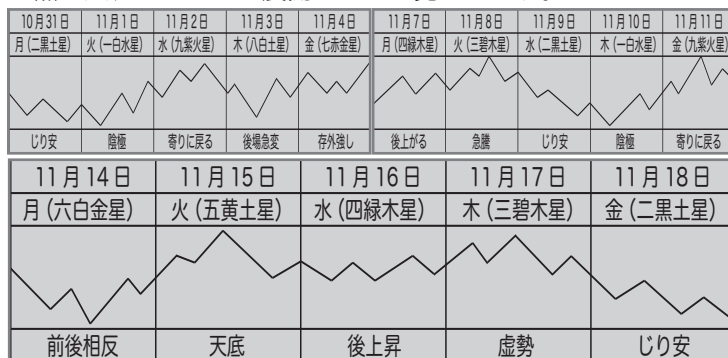
この数字を受けドルは対円ではじり高で引けたのですが、問題は7日の東京朝。なんと、F R Bがクリントン候補に対する捜査見直しにおいても影響は変わらない、と述べたのです。

対象は数千通とすらされていたにもかかわらずこうした内容が発表されることはかなり政治的配慮がなされた可能性が高い、と考えざるを得ません。とにかく相場に動いて何とか平均を上回りたいヘッジファンドなどから見れば、なんという余計なことをやってくれたのだ、という思いで一杯でしょう、

ドル円は先週のレンジの中心ともいえる104円台を回復してしまいました。こうなると選挙後のドル高シナリオへの回帰がもっともありそうなことと思わざるを得ないのですが、何分6月のBREXITの記憶も鮮明な投資家の中にはここはやは

りリスク回避するしかない、という方も多いでしょう。リスクを取らなければリターンはありませんが、逆に言えばマイナス・リターンを回避する最高の方法はリスクを取らないことともいえるからです。

さて九星波動月盤はこの荒れた7日から《二黒土星》に入ります。前は前半ドル急落、後半はドルじり安という展開。年盤《二黒土星》も来年1月で終わるわけですが、この二回目の二黒土星、どのような展開となるか見ものです。



相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (370)

中原 駿

上野は夢の中にいるはずだった。いつもはぐっすり寝てしまふ機中にもかかわらず、上野は妙な声を聴いた。

「お客様、起きていただけますか」。キャビンアテンダントの声だった。C Aが睡眠中の乗客を起こすのは異例だった。

「何でしょうか…」。上野は怪訝そうな声で聞いた。シンガポール—東京間の夜行便で、熟睡中で起こされる不快感は半端無い。「お客様、東京からの指示で封筒の中身をご確認ください、とのことです」。封筒の中身…。これは俺に出された書類なのか。さっきは預かってくれ、運んでくれ、といった内容だったはずだが…。いったい、何が起こったというのだ…。

第六感の 死屍累々の巻き戻し



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

勝者は非参加者

前は「先週の金融市場は、大統領選におけるショック安の予行演習のような相場であった」と述べたが、予行演習が幸いしてか、ショック安は数時間で終了した。ドル円は東京市場朝、クリントン勝利を期待して105円46まで上伸。しかしその後トランプ勝利が確定する前の午後2時には101円ローまで売られた。この展開はサプライズであったが、ブレイグジット同様、予行演習通り。本当のサプライズはその後の巻き戻しの早さである。地獄の踏み上げ相場、戻り売りを狙った投資家のショートをして飲み込み、ほぼ壊滅状態、死屍累々。その日のうちに元の木阿弥状態。イッテコイの値幅は往復で9円。この動きはさすがに想定外であった。

トランプ氏に賭けた投資家がいて、最初の急落がとれたとしても、次の巻き戻し相場で大やられしたことであろう。クリントン氏に賭けた投資家は当然早い段階でロスカットが入り、そこからドテン売りに回って、次の踏み上げ相場で更に被害を大きくしたのではなかろうか。つまりどちらの候補の勝利に賭けていても、この相場は取れないかった方が多いようだ。本欄では「マーケットには近寄らない方が良いだろう」と述べたが、勝者はこの相場に参入しなかった投資家ということになる。

さて、今回の急落、そしてその後の大反騰でドル円のサブサイクルが確定した。当初は「強気型サイクルになりつつあり、その目標値は以前から指摘した通り、106.68～107.80。

封筒を開けると、書類が3枚。

一枚目には上野の部下が起こした巨額の損失に関する数字。二枚目にはその後の上野のポジションの推移。

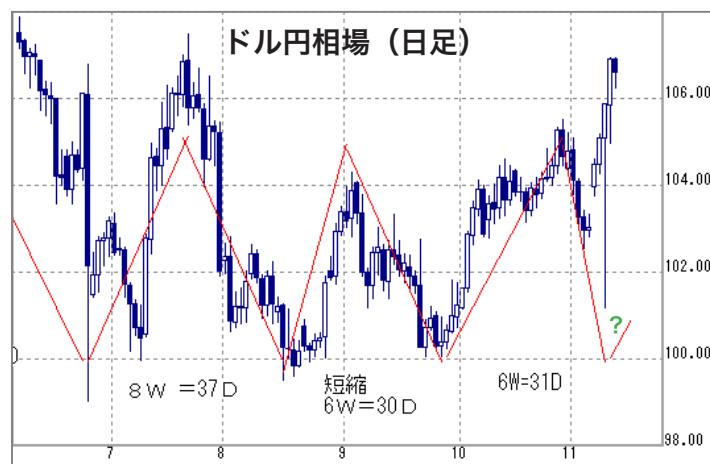
そして三枚目には現在の上野のポジションが書いてあった。一枚たりとも、一円たりともズレていない。これは恐ろしい数字だった。

いったい、誰がこのような数字を本社に通告したのか、いやそもそも、この書類はだれが作成し、どこまで伝わっているのか。皆目見当がつかない。というより、上野は目の前が真っ暗になる感覚に囚われた。全てが伝わってしまっているのか。だれに伝わっているのか。自分はいったいどうなるのか。頭と目の前がぐるぐると回り出す。眩暈なのか、それとも物理的に動いているのか、それは、上野自身にもわからなかった。

現行サイクルではショック安がない限り、起点(9月27日100.09)を下回ることにはないと見る」と述べた。しかし9日にショック安が到来したものの、起点を割らずに反発。そして高値が更新された。強気型が維持されたわけだが、ここでサブサイクルは6週目だがボトムを打ったと考えられる。勿論、最大でまだ5週間残されており、旧サイクルが続いているなら、実際目標値のゾーン内に入ったことから、ここからトップアウトしてボトムに向けて下げが入ることも考えられる。しかし9日の急落幅を超える下げはないとみる。

現段階では11月9日に6週でサブサイクルが短縮されてボトムを打ち、今週は新サイクルの1週目と考えるなら、この水準は依然として買い場である。

新サイクルの目標値は109.97±0.64。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第15回】NY原油のサイクルについて (2)

今回の米大統領選では開票日直後から翌日にかけて、各種金融市場で強烈なヒゲが出現。かく言う私も仰天しました。

ただこれは当欄の最初の方でお話したかも知れませんが、この手の値位置は月足、それもサイクルの観点で見ると良い節目になっている事が多いのです。大局を把握していると変にあわてて悪手を打つ回数が減ります。存外、これが勝利の近道です。

さて、今回はNY原油の2回目。前回は1998年12月21日の10.35ドルを起点、2008年7月11日の147.27ドルを天井に2016年2月11日の26.05ドルで長期18年サイクルのボトムであったと考えるべきとお話しました。通常、サイクルは2分割ないし3分割されるので、08年安値は9年ハーフサイクルの前半のボトム、今年2月の安値は後半のボトムと考えられます。『フォーキャスト2016』でメリマン氏は9年サイクルが3つの3年サイクル(30～42カ月)で構成されていると予測しました。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

週初、さもなくば25日前後

先週、11月5日の金星・天王星ライン(120度)は12月25日を皮切りに翌年5月19日、同年11月11日と都合3回形成される土星・天王星ラインの「トランスレーション」として“これは時として実際に形成されるアスペクトの予告編のような役割を担う。ラインは天体の間の「調和のとれた」関係だが、裏返せば「相場の頂点」と関連性があるだけに、ここでも波乱の香りがする”とした。更に“これが予告編として機能するなら、年末から来年にかけての株式相場の“頂点”と“急落”と関連する可能性がある。…あくまで予告編であればこの株価下落は本格的な天井ではないかもしれない”とした。

更に11月6～16日まで「ヘリオ射手座ファクター」が発生する点を指摘。金やユーロは“当初は入居当日から4営業日前までに安値をつけてから数営業日急騰するパターンが多かった

ただこの3年サイクルは少々曲者。何故なら08年以降の相場はダブルボトムがあり、尚且つメリマン氏のカウントは日柄が短いのです(青字の部分)。一方、ダブルボトム後半からカウントした場合(ピンク字の部分)、第二3年サイクルの日柄が2カ月延長します。この見方だと11月は2月安値から9カ月目。まだ第三3年サイクルはボトムをつけていません。

未確認ですが、私自身は第二3年サイクルが33カ月でつけた可能性があると思っています(赤字の部分)。しばしば最終サイクルは短縮するので、年末から来年にかけて、相場は2月安値を試すようなボトムがあるのではないかと思います。



が、ここ数年はその逆パターン、即ち急上昇からの急反転も多く、場合によっては崩落の引き金を引いたケースも少なくない。…金やユーロが下落するようなら、逆に株式や米ドルは上昇する可能性”と指摘した。実際の相場はこのヘリオ射手座ファクター中にして、火星が水瓶座にサインチェンジした8～9日にかけて急騰急落場面を形成し、金星が山羊座、水星が射手座にそれぞれサインチェンジした11～12日に流れを引き継いだ。奇しくも先週“往々にして惑星サインチェンジは反転ポイントになりやすい。これが3つまとめて来る今週はその可能性がある”という見方が現実のものとなった。大統領選開票日前後で反転した種々の金融市場は大半が先週末に高安値をつけている。仮にサインチェンジが相場の反転と関連するなら今週初めの相場は反転ポイントになるのではないかと。

しかし、先週の流れを引き継がれるようなら恐らく月末25日、木星・冥王星スクエア(90度)の第1回目の時間帯の方が天体位相としては強力なので、ここが変化日になりやすい。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み!!

今週のアストロロジー info

- 11月14日(月) 国内市場転換点
- 11月15日(火) 上昇有利な日
- 11月16日(水) 気迷い 五里霧中
- 11月17日(木) 無風
- 11月18日(金) 原油の動きに注意
- 11月19日(土) 毎日、材料は強弱両方流れている
- 11月20日(日) 見切り千両もあれば、見切り千両もある

世界No.1
ヘッジファンドの
マクロ経済分析

マーク・ファーバー博士の
月刊マーケットレポート

The Gloom, Boom & Doom Report

ヘッジファンドランキング1位をたびたび記録した男が世界市場のマクロ経済を読み解く

グロム・ブーム・ドゥーム(GBD)とは、格差、上昇、破滅を意味している。GBDレポートは全世界の主要な投資機会を注目した格差・金融・マクロレポートである。ホラティウスの詩集の言葉通り、時代の転換点にある者はやがてよみがえり、得意の戦術にある者はやがて没落する。本レポートの目的は、特定の投資アイデアやスキームを解説・歴史、そして社会的なトレンドを投資家に警告を発して、短期・中期投資機会と次の投資機会を提示することである。購読者は、自ら金融市場を分析し、多くのさまざまなアセットクラスに投資できる知識と情報がある。これらで、債券、商品、不動産などいろいろな分野で投資を推奨してきた多くの購読者はそれを活用している。

【配信方法】 電子メールにて月1回配信(最新版は毎月15日頃に配信)

【料金】 1か月 本体 10,000円(税込 10,800円)

※このレポートは、お客様が解約手続きを行うまで自動継続されます。

【販売・配信】 Traders Shop / ハンローリング株式会社

マーク・ファーバー博士の
月刊マーケットレポート

THE GLOOM, BOOM & DOOM REPORT

お申し込みはこちらの短縮URLから【Traders Shopお申し込みページ】へ <http://goo.gl/6efiPM>

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト
2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

「サイクル」「アストロロジー(占星学)」「テクニカル」
この3本柱で2017年の動向を予測!

アストロロジーでは2017年の水星および金星逆行の解説に加え、有力政治家の出生図やFRB、NYSE、そして米国の始原図から予測。主要天体位相の発生時間と始原図とを重ね「何故この時期は重要なのか」を説明。『フォーキャスト2016』目玉解説の土星・海王星ウィニングスクエアは終了したが、その影響は2017年中もまだ残る。メリマン氏はこの点を「世界無責任時代(ただし、もれなくスケープゴート付き)」という副題をつけて「土星はコントロール、統制を意味する。特に、政府や金融界のリーダー達による権力の座にある人々が持つ、統制への欲求・衝動を象徴。しかし海王星は境界など知らない、とりわけ境界線、限界、統制」という意識が欠落している。…状況が制御不能となりヒステリー状態になっていくという一連の反応は、何も中央銀行とインフレーションの問題に限ったことではない」と述べている。2016年に起きた事象は「制御不能」と「無責任」という言葉は非常に的確だった。

恐らくこのスクエアの解説も行いつつ、次の一手が予測されるのではないだろうか。

幾つかの主要相場では長期相場サイクルの節目に入っており、アストロロジーとサイクル、どちらでも必読の内容となるだろう。

レイモンド・メリマン 著 秋山日揺香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

12月26日発売予定 予約受付中!

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ: 投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町 3-12-11GRANDE 人形町 6F 電話: 03-3669-0278 FAX: 03-3668-4444